

# 民主島根

2024年  
**2.11**  
第1442号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444  
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

## 中部地区・決起集会 自民党政治終わらせる 党の希望の対案とどけよう

### 出雲 大平 衆院、むらほ 衆院、らが訴え



団結のこぶしをあげる大平氏（右から2人目）ら（出雲市）



亀谷（左端）、宮脇（その右）の両市議と宣伝する大平氏（大田市）

日本共産党中部地区委員会は1月27日、党大会に参加した大平よしの衆院中国比例候補を迎え、出雲市内で新春決起集会を開きました。むらほえりこ衆院1区予定候補、亀谷優子大田市議も大会報告しました。

大平氏は、岸田首相が能登半島地震を受けても原発再稼働方針を変えず、国民には負担増を求めながら、自らは裏金づくりを進めてきた自民党の金権腐敗政治を批判した上で、党大会はあらゆる面で展望を指し示す大会となったと述べ、「党の希望の対案を大きく届け、一日も早く解散総選挙に追い込み、自民党政治を終わらせよう」と呼びかけました。

むらほ氏は「大会決定は行く手を照らす羅針盤だ」と確信した」と訴え、自民党政治のもとで苦しめられている人と手をつなぎ、希望の政治実現へ力を尽くしたいと決意表明しました。

上代善雄県委員長は「総選挙で躍進するため軍備より農林水産業に大平氏、亀谷・宮脇市議がまちかど演説

日本共産党の大平よしの衆院中国ブロック比例予定候補は1月27日、大田市内で亀谷優子、宮脇康郎の両市議と一緒にまちかど演説し、次期総選挙で再び国会へ駆け上がる決意を述べました。駆けつけた聴衆から大きな激励が寄せられました。

シヨッピングスーパー前でマイクを握った大平氏は、「自民党派閥の政治に一致団結して強く大きな党をつくらう」と強調。吉井安見地区委員長は「党大会決定を力に、一人ひとりが党を語り、支持を広げよう」と呼びかけ、参加者は決意を固めました。



能登半島地震を受け、日本共産党島根議団（尾村利成団長、大國陽介幹事長）は1月30日、県に申し入れ、島根原発2号機の再稼働同意の撤回と災害に強い県土をつくるよう申し入れました。（写真）むらほえりこ衆院島根1区予定候補、橘ふみ松江市議が同席しました。

申し入れでは▽原発震災時の避難計画の実効性の再検証▽被害想定は最大規模を想定すること▽現在2日分を目標とする防災備蓄物資計画の見直し

産業の農林水産関係・国家予算が24年度、2兆2686億円に対し、軍事費は約8兆円にも上っている」と指摘。

世界的な食料危機のもと「大切な農林水産予算より軍備強化に突き進む岸田政権にこの国は任せられない。退陣に追い込み、税金の使い方を改めさせよう」と呼びかけました。

### 島根原発2号機再稼働同意の撤回を 党県議団 能登地震受け県に要請

能登半島地震を受け、日本共産党島根議団（尾村利成団長、大國陽介幹事長）は1月30日、県に申し入れ、島根原発2号機の再稼働同意の撤回と災害に強い県土をつくるよう申し入れました。（写真）むらほえりこ衆院島根1区予定候補、橘ふみ松江市議が同席しました。

申し入れでは▽原発震災時の避難計画の実効性の再検証▽被害想定は最大規模を想定すること▽現在2日分を目標とする防災備蓄物資計画の見直し

「大規模地震発生時や発生前の対応について議論していく。引き続き、検討していく」と答えました。

土本総務課の大谷寿課長は「大規模地震発生時や発生前の対応について議論していく。引き続き、検討していく」と答えました。



ぜひご登録をお願いします

しーなど14項目を要請しました。

尾村氏は、科学者が「未知の活断層が動き、複数の活断層の連動があった」と指摘しているとして、島根原発直下に同一線上に存在する宍道断層（39キ）と鳥取沖断層（98キ）の連動性の再評価を要求。「リスクを過小評価するのではなく、想定外を想定すべき」と強く求めました。

防災部の森本敬史部長は、半島部を有する島根県で同様なことが起きた場合に備え、見直し・強化を図っていく考えを示し、被害想定や断層の評価については「新たな知見や国の検討状況を注視し、対応する」と回答しました。

### 鼓動

世の中には溢れるほどの書物がある。既にある書物に、重ねて新たな書物が生み出される。多くの書き手や理論。一冊の書が心のささくれを癒してもくれ、また、学べきことの多さに気づかせてくれる▼先日、(公社)全国学校図書館協議会・毎日新聞社主催の「青少年読書感想文全国コンクール」入賞作品が発表された。小学生から中高生の作品まで秀逸ぞろいだ。表現の確かさもさることながら、彼ら一人ひとりが自分の内面に踏み込み、自身を主観的に捉えながら、一方で客観的に省みた過程を丁寧に描き切った▼それぞれの年代で読むべきとされる書は少なくないが、冒頭でも触れたように、我々を取り巻く環境は溢れる書物の海原のようであり、出会うべき一冊との邂逅は奇跡とも言える。その海原から彼らは宝のようないっ冊に出会い、かけがえのない体験をした。感想文を書くという課題があったからこそ出会えた一冊もあったろう▼近年、「読書感想文」が夏休みの宿題から消える傾向にある。その要因は様々だろうが、それでもやはりこの傾向を憂えずにはいられない。「読書」によって自らを省み、「書くこと」によって客観化する作業を、人生のある時期、敢えて強制的に経験することは必要なことではないかと入賞作を読みながら思う▼年齢を重ねても自らを客観視することは容易ではない。しかしこの客観性こそが自らを成長させ、自らの抱える困難のありかき気づかせ、それを乗り越える力となるのではないか。入賞作には彼らが生きていく上で武器となる客観性が見事に輝いていた。(江)